

(17) “這う”より“泳ぐ”方が先 幼いほどうまくできる

漢字は、言葉を初めて学ぶ時に一緒に学べば、たやすく覚えられますが、言葉を先に学んで、それから長い期間を経て漢字を学ぶと、漢字はとてもむずかしくなるのです。これが私の発見した新しい事実です。

これは、歩くこととスケートで滑ることを一緒に習えば、両方とも早く上達するのに、歩くことを先に成功させ、それから期間をおいて滑ることを習うと、スケートで滑ることが大変むずかしくなる、というマグロウの実験によく似ていて、実に興味深いものがあります。

また、これと同じようなことが水泳にもあることが、オーストラリアのチンメルマン夫妻により明らかにされました。それは、昭和48年の5月、アメリカのフィラデルフィアで開催された「人間能力開発国際会議」で発表されましたが、ちょうどその時、私もその会議で「漢字による幼児の能力開発」について発表することになっていましたので、夫妻の発表を直接見聞することが出来ました。

夫妻の報告によれば、「人間がこの世の中に生まれ出て、一番初めに出来ることは“這う”ことではなくて“泳ぐ”ことだ」というのです。けれども普通には、赤ちゃんが一番初めに出来ることは“這う”ことだと、だれもがそう思って、このことに疑いを持った人はだれ一人いなかったと思います。

けれども、赤ちゃんが腕で体重を支え、その腕を使って体を進めることは、赤ちゃんとしては大変な仕事です。それに比べると、水の中では赤ちゃんはひとりで上向きに浮くことが出来、手を軽く動かすだけで体を進めることが出来ます。

しかも、生れるまでは、胎内でずっと水(羊水)の中につかっいて、言わば“泳いで”いたのですから、その感触の残っている生後まもない時期ほど、“泳ぐ”ことが容易に出来るわけだということです。

ところが、生後まもない時期だと容易に出来るこの“泳ぐ”ことが、成長するにつれて次第にむずかしいものになってしまうのです。幼い時だったら少しの練習でうまく泳げるようになりますが、成人してからではどんなに練習しても泳げるようにならないことが、決して少なくありません。

もう一つ、ついでに言いますと、音感教育がそうです。音感教育が幼い時ほどわずかの練習で成功することを、幼児の音感教育で有名な木下達也先生が指摘していらっしゃいます。「四歳から音感教育を始めた幼児は、三歳から始めた幼児の二倍の練習を必要とする。しかし、二歳から始めれば、三歳から始めた幼児の半分の練習で済む」と。

ローラースケート、水泳、音感教育、これらはいずれも早期に教育を始めれば成功し、遅く始めると労多くして功少なしと言えるものです。成長を待ってゆっくり始めた方が良いものと、このように早く始めた方が良いものとあることを知る必要があります。